２０XX年　初秋　このシリーズのヒロイン・山田由真が、特殊機動隊本部（首都ブロック）に、呼び出された。

『おい、く◯ボケ慰安部！！石井長官が大変だから、今すぐ来い！！』

　スマホ越しに、恋敵・橋本次官の不機嫌な空気を感じ取った。
「了解です、橋本次官。」
　読みかけの漫画・鬼殺の剣を放りだし、身支度を整えて迎えの車に乗り込んだ。
「どうなさったのかな？石井長官が、大変だって・・」
　民間人に隠れて妖魔を狩る組織・法務省特殊機動隊。組織の内外で『鬼長官』と恐れられる彼に、何があったのだろう？
　頭の中、数多くの？マークを浮かべながら、東京都某所の地下秘密基地に、到着した。

　長官執務室の前で待っていた、由真より優秀な隊員たちが、皆、青ざめた表情をしている。
　ただならぬ気配を感じた由真は、恐る恐る尋ねてみた。
「な・・何があったのですか？皆さん？」
「・・・」
　しかし、隊員たちは何も答えなかった。
「よう・・クズ慰安婦・・」
　執務室のドアの前には、恋敵の橋本次官が立っていた。いつになく陰気で怖い顔をした彼は、吐き捨てるように言う。
「悔しいけれど、今日は貴様でなければどうにもならない事態が起きた。早く慰めて差し上げろ。」
「りょ・・了解です、橋本次官。」
　橋本次官がドアを勝手に開けて、由真が、恐々と執務室に入る・・珍しく、灯りはなかった。
「長官、石井長官？」
　ドアが閉まると同時に、由真は、愛する長官を呼ぶ。暗い執務室は、メチャクチャに荒れていた。重たいデスクはひっくり返り、高価なイスは壊れ、破れた書類が床いっぱいに散らかって・・ただならぬ雰囲気が、部屋を支配していた。
　慌てた由真が灯りをつけると、壁に背中を預けている長官が居た。
「！！！！」
　見ると、壁の所々に赤い血がついている。誰かが、血が出るまで壁に拳を叩きつけたようだ。
　まざまざと残された跡に、由真は息を飲んだ。
「・・すまない・・」
　そこへ、弱々しく声をかけたのは、石井長官だった。彼は、背広の上着を脱ぎ、ネクタイを緩めていた。
「ははは・・今の私は、無様だよな・・」
　見ると、両手の拳が真っ赤に染まっている。
「どうなさったのですか！？」
　とっさに、持っていた可愛いハンカチで、ちょの右拳を包んだ。
「もう一枚ありますか？」
　言われて？すみやかに青いハンカチを、由真に手渡した。
「一体・・どうしてこのような・・執務室の壁は、サンドバックじゃありません・・」
　大きくて清潔なハンカチで、左の拳を包む。
「大事な武器を持つ両手を、自分から痛めつけないでください・・何がどうしてこうなりましたか？私でよければ、お話ください。」
「・・・」
　そのとき・・長官の目から、涙が零れた。
「・・由真ぁ・・」

　瞬間、彼女の小さな身体を抱きしめた。
「きゃあ！！」
　そのまま、二人は床に座り込む・・
「由真・・私は・・・どうしていいのか？」
「お・・お仕事がきつくて、泣いているのですか？」
「そうじゃない！！」
　長官は、由真の肩に顔をこすりつけた。
「・・・そうじゃない・・・」
　次の瞬間・・彼は堰を切ったように号泣した。
「E―15号のバカヤロウ！！あろうことか、あいつの所持していたデスクトップパソコンから、未成年男子の隠し撮り画像が、山盛り大盛りてんこ盛りに、出て来たがった！！」
「・・・嘘？」
　青ざめた由真は、自身の耳を疑った。
「その方・・たしか8年前に機動隊を脱走した・・」
「ああ、私と同じE組で、同期の隊員だった。あいつだ・・健全な小中学生から、イケてる高校部活ボーイズまで・・盗撮加害を・・あああ、悪い夢なら、覚めてくれ！！」
　怒り心頭の長官は、我を忘れて泣き続けた。

　面倒くさいけど、説明しよう。
　とある密告により、8年前に組織を抜け出した機動隊隊員・E―15号の潜伏先が判明した。そこで、北九州の『マッコウ住建』社長宅を家宅捜査したところ、白いデスクトップパソコンを見つけて押収した。
　さっそく、東京都の科捜研で分析したところ、どう見ても義務教育真っ只中の、これまた健全な児童＆生徒たちの、どこから見てもご立派な隠し撮り画像が、山盛り大盛りてんこ盛りに記録されていた。
　これは、E―15号を匿っていた会社社長も、まったく知らないことだった。
　悪名高いパパラッチ愛用の、超高性能カメラで、潜伏先の福岡県内外の、顔面偏差値お高めな児童＆生徒を、思う存分に盗撮していた模様。

　・・ライバル特殊性癖を垣間見た長官は、愕然とした・・

「だ・・大丈夫・・ですか？」
　事態が飲み込めてない由真は、号泣する長官の背を、優しく撫でた。
「あのバカ・・」
　混乱しながらも、何とか、ことと次第を説明しようと、彼なりに言葉を選んでいた。
「・・お人好しの会社社長に・・匿われていたあのバカ・・調子に乗って・・九州のあちこちで盗撮行脚してたらしい・・PTAも大激怒だ・・」
「イエス・ロリータ・ノータッチの精神は？」
「こっちが聞きたいっ！！直接、本人にっ！！」
「・・・長官、落ち着いて・・」
　彼と出会ってから今の今まで、この様に号泣する姿を見たことがなかった分、由真も由真で、混乱した。
「ううっ・・」
　嗚咽をしながら、長官はシャレにならない事態を、ぼそぼそ報告した。
「・・私がいけなかった・・8年前のあの夜・・組織から逃げ出すあのバカを・・刺し違えてでも止めておけば・・このようなことには・・」
　今更ながら背中を震わせ、嘆き続ける。

「ははは・・情けない・・よりにもよって、対妖魔組織から、ど変態を解き放ってしまった・・特殊機動隊長官として、被害者たちに、どうお詫びすればいいのだろうね？」
「青少年育成条例違反ですものね。でも、あなたは何も悪くないです。」
　由真は改めて、愛する男を抱きしめた。
「福岡県警と福岡県教育委員会の前で、組織を代表して100回切腹したところで、何のお詫びになるものか？恥ずかしいと言うより・・憎らしい・・」
「ご自分を責めないで。あなたもある意味、被害者じゃありませんか？」
「・・ライバルだった・・少なくとも私は・・そう思っていた・・出会ったときからケンカばかりしてた・・いつか・・あいつを超えようと・・切磋琢磨して・・それればかり・・」
　機動隊を抜け出した男は、遠回りで長官の思い出を傷つけていた。
「長官・・」
　ほろり・・気がつけば、由真はもらい泣きしていた。
「私がカスなら、あいつはクズだ・・もしも私が子を持つ親なら、知り合いの趣味が児童の盗撮だと知ったとき、1000％ぶちキレるだろう。」
「・・・」
「部下の罪は、長官である私の罪・・部下の恥は、機動隊全体の恥だ・・」
「それでも、未成年男子連続盗撮事件は、15号さんが全部悪いのです！！決して、あなたの罪ではございませんっ！！」
　言うなり、由真は長官の額にキスをした。
「・・由真？」
　一瞬だけ泣くのをやめて、由真を見た。
「ご自分を責めないで・・そうでなくても、あなたはたくさんの荷物を背負いすぎです。その重さに押しつぶされそうになっても、歯を食いしばって頑張って・・だけど、それではあなたがかわいそう・・」
「・・・」
　その優しいまなざしに、長官は改めて、心打たれた。
　ムギュ・・由真が長官を抱きしめる。
「・・そうならないよう、私は、あなたに付き添います・・」
「愚か者・・我が両手は血で汚れてる・・確実に地獄行きさ・・」
　瞬間、また長官の涙腺が崩壊した。
「だから、私もついて行くのです。あなたがイヤと言っても、離れません。」
「・・この組織の恐ろしさも、あいつの性癖のヤバさも、理解できていないくせに・・」
「愚か者で結構です。」
「対妖魔組織の中で、由真が一番健全だ・・」
　ぽんぽん・・由真の髪を優しく撫でた。
「ありがとう・・無様な私に、気を使ってくれて・・」
「とんでもないです！！私、ただ、あなたが大好きなだけです！！」
「私の人生と使命に、お前がいなかったら・・考えただけで、ゾッとする・・」
　この後、長官はようやく涙をぬぐった。
「・・もう大丈夫・・大丈夫・・」
　由真の額にキスをすると、彼はゆっくり立ち上がった。
「我々がなすべきことは、ただ一つ・・」
　まるで残酷な神に誓いを立てるように、神妙な表情で言い切った。
「機動隊を抜け出したあげく、未成年男子連続盗撮事件で恥までかかせたあのバカは、必ず捕らえてぶちのめす。最低10000回ぐらい。」
　使命に追い詰められた長官を前に、由真は、改めて彼の立場の重みを知った。
「それが、機動隊長官としての、私の『責務』だ・・」
　重苦しい空気が、晴れやかになることはないが、それでも長官は、立ち直ったようだ。

（長官・・頑張って♥)

可憐な慰安婦・由真は、心の中で愛する男を、応援するのだった。

ちなみに・・この１５号と言うバカと、我らの石井長官が、劇的な再会を果たすのは、これとは別のお話である。

意味なく終了。